

「教育実習体験レポート」

[公立高等学校 国語]

私は、3週間の教育実習に行ったが、そこで様々なことを経験させてもらった。このレポートでは、教育実習を通じて感じたこと、理解したことを、実習中の経験などを通じて書こうと思う。最初に結論を述べれば、教師という仕事の大変さ、というのを改めて感じたのだが、ここから具体的な出来事も踏まえ述べていく。

実習の中では様々なことに参加させていただいたが、教科の活動の一環として教科会議（私は国語科の実習生だったため国語科の会議）に出席させてもらった。そこでは、新しく導入する観点別評価方式の方法について、生徒のことについての話し合いなど様々な議題について話し合いがされていたのだが、その中でも最も印象に残るのが、3年生を対象として小論文指導の担当についての話である。これは進路指導部から国語科に対して依頼があったようなのだが、ある先生から「なぜ小論文を国語科で担当しなくてはいけないのか。」との問題提起があった。話を聞いていると、私の実習校では全教員を対象とした小論文研修が行われているようで、それなのに国語科だからという理由で自分たちにその仕事が回ってくるのはおかしい、他教科の教員も仕事を担うべきだ、というのがその先生の主張だった。私も学生の時には小論文のことで先生にお世話になったが、そうしたことが学校内の部署ごとに仕事を誰がするかを押しつけ合っている（言い方は悪いが）のを見て、綺麗事だけでは先生方の裏を見ることができた。

ホームルーム活動では、私は2年生の進学クラスに任せさせてもらい、ショートホームルームやロングホームルームの進行をさせていただいた。このクラスは学年でも屈指の静かなクラスで、授業も担当させていただいたのだがとにかく反応の薄いクラスだった。実習期間の中では学年行事や文化祭のことについての活動が中心だったのだが、特に文化祭のテーマをきめるといときには、ほとんどの生徒が意見を出さず、進行がかなり大変だった。また、実習校にはクラス全体で、教科にとらわれない活動を行う授業があった。その授業では担任に加えもう一人の先生が授業に携わるのだが、その先生は「このクラスはとても静かで大変だ。」と、かなり苦労されていたようで、打合せなども念入りにおられた。実際授業をしてみても、生徒たちにペアないしグループでの話し合いをしてもらうと思っても、あまり積極的ではなくかなり大変だったが、その代わりよくできる生徒が多く、模範的な解答が出ることも多かった。それに比べ、もう一つの担当クラスはとても活発で、いわゆる教科書的な答えの他にも、かなり独創的な考え方を持った生徒が多かった。この2クラスは、それぞれのムードが違うため、同じ範囲を扱うとしても活動内容の時間の見積もりやその内容に微妙な差を設けたりして、どうすればそのクラスの生徒に合った授業ができるかを考えなくてはならなかった。これを授業が始まってから毎日続けなくてはならなかったのはかなり大変だった。これらは実習期間にさせていただいた実習内容の一部だが、正直かなりしんどかった。先生方はこれの何倍もの仕事をこなしておられることを考えると、教師の大

変さというものを、身をもって知ることができた。ただし最終日には、今まで授業などであまり反応を示してくれなかった生徒達から、「ありがとう」の言葉や黒板にメッセージを書いてくれたのを見て、教師という仕事の良さも再確認することができた。

「教師はブラック職業だ」というのは、あながち間違いでないだろうし、改善していかなく
てはならない。しかしこの仕事はただブラックなだけではない、素晴らしい魅力もある仕事
であると言うことができる。